

平成 22 年 4 月 6 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2007～2010  
課題番号：19520092  
研究課題名（和文） 「高野切本古今集」全20巻の復元研究—古筆復元の方法論の確立—

研究課題名（英文） Execution of restoration of Kokin-syu 20volumes known as Koyagire  
—Establishment of methodology in restoration of [kohitsu]—

研究代表者

森岡 隆 (MORIOKA TAKASHI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：70239630

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学 美術史

キーワード：高野切・古今和歌集・古筆・復元・仮名

## 1. 研究計画の概要

本研究は、11世紀半ばの3人の能書（第一種・第二種＝源兼行・第三種）が分担揮毫（寄合書き）した『古今和歌集』現存最古の写本ながら、完本3巻とわずかな零本・断簡（切）しか伝存しない「高野切本古今集」20巻を復元し、王朝古筆美を再現することを課題とする。

## 2. 研究の進捗状況

研究方法は、「高野切本古今集」第一種・第二種・第三種の各々の仮名の字母とその頻度、連綿手法、詞書・詠者名・歌・左注を規則正しく配した書写形式などの特徴を踏まえ、また各々の同筆遺品も参考にしながら、臨書で培った技法を駆使して、外題（題簽）や内題、奥題も含め、欠失部分を倣書で補うというもの。なお、外題を除く本紙は、原本に準じて縦約26cm×横約53cmの雲母撒きの料紙を用いる。

すでに復元が成っていたものに加え、当該3年間で巻十・巻十二（以上第一種）、巻四・巻七（以上第二種）、巻十三・巻十五・巻十六（以上第三種）の7巻の復元が成った。

また完本ではあるものの、誤って重複揮毫された2首（270・298、ともに現存）を江戸期あたりに切除した卷子で伝存する巻五（第二種）についても、その2首を各々当初の位置（第4紙末、第8・第9紙にまたがる両紙）に再配置した臨書巻が完成した。この位置は研究代表者が特定し、橋本貴朗氏が検証したものである。

復元の根幹となる断簡類については、江戸時代のものと思われる巻一—58・59（第

一種）と巻二—131（第二種）の模写断簡2葉（西尾市岩瀬文庫蔵）を調査した。このうち、前者は近衛家熙（1667—1736）による57～60番歌の4首の模写で知られていたが、後者は新資料であり、その直後に手鑑「藻塩草」（国宝・京都国立博物館蔵）所収断簡など3点を接続させることにより、巻二の巻末1紙（幅約53cm）がほぼ復元可能となった意義を詳述した（下記5〔雑誌論文〕所載）。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

巻八・巻二十の完本2巻を除き、「2. 研究の進捗状況」で記した巻五も含めて18巻復元しなければならないが、そのうち17巻は一応成ったとあってよい。

## 4. 今後の研究の推進方策

- (1) 巻十七（70首）の復元。
- (2) 各巻の細部修正。
- (3) 全巻展示の実施計画の推進。

## 5. 代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 森岡隆、「高野切古今集」巻二—131番歌模写断簡出現の意義、書美 75号、見返し—1頁、2008年、査読無

〔学会発表〕（計2件）

- ① 森岡隆、仮名表現の歴史と教材化のヒント、平成21年度福島県高等学校経験者研修Ⅱ・教科指導研修・書道、2009年5月7日、福島県教育センター
- ② 森岡隆、書学書道史の教育の現状と将来、書学書道史学会大会、2007年11月17日、筑波大学

〔図書〕（計1件）

- ① 森岡隆、芸術新聞社、決定版 日本書道史（共著）、2009年、23-43頁・45-63頁